

Y-95

148
405

中西
演劇
脚本

伊達錦五十四郡

前編

脚本伊達錦五十四郡

特52
566

役名

●御廟所無量光院客殿の場
●牡丹畑士農工商議論の場

一 小 姓 二 人	一 同 宿 二 人	源 九 郎 經	伊 達 次 郎 泰 衡	百 姓 籠 の 太 治 兵 衛	奴 房 平	同 加 藤 長 衛	和 泉 三 郎 康 衡
一 奴	一 行 列	一 奴	一 秀 衡 の 尼 公	一 無 量 院 瑞 元 和 尙	一 同 春 伊 勢 平	一 同 夏 伊 勢 平	一 奴
一 近 習 二 人	一 元 吉 四 郎 高 衡	一 秘 小 篁 衡	一 錦 戸 太 郎 國 衡	一 佐 藤 後 室 萩 の 堀	一 奴 四 季 平	一 同 信 夫	一 秘 宮 城



平舞臺向ふ大襖双方に來光柱彫物の欄間柱に禪寺の懸からある舞臺前の高欄花道も一間計
 女宛折廻りの高欄都て奥州無量光院方丈の体真中に秀衡の尼公水晶の珠敷を持萩の前後室
 の拵らへ小笹かるも松ヶ枝信夫宮城姫の拵らへにて付添次に上下の近習二人付添居る上手
 に瑞元和尙大和尙乃形りにて珠敷を持同宿二人付添ひ挨拶の体唐樂にて慕ひらく 茲先君
 藤原の秀衡様去年九十二歳にてお果遊ばし今日は則小祥忌に當らせ玉へば此七日が間御廟
 所無量光院に於て御法事行なはれ御役目との申す瑞元和尙様には 皆々御苦勞に存じ升る
 端「是はく御挨拶奥州五十四郡乃主藤原の秀衡入道には弓箭乃道切れて誠に光陰矢の
 如く小祥忌の法會執行ふの愚僧の役目尼公にの遠路の御參詣御苦勞に存する 尼「誠に無二
 の御中なればこそ有難い御法會委も年罷寄り行歩言語も心に任せず幸ひ是る佐藤庄司が
 後室萩前が妾の助抱 端御老体の身さもらう秀衡存命の内愚僧を招き一大事を頼み置
 と姿を盡き永く下され一故愚僧開眼致し此佛殿に納め置上は秀衡此世にあるも同然日牌月
 牌の云に及ばず万事心に掛玉ふか 茲残る方なき心添へ亡君の御子鋪戸殿を始め伊達和泉
 本吉何れも父御に劣らぬ勇士存生に書殘され一遺言狀并に篋乃箱貴僧に預置かれし事鎌倉
 に聞へなば今にも一大事申來らんを計られず 尼「自然左様の事あらば篋を悴共に渡して事
 を沈め其後遺書を開き見よとわらわへ夫の物語 茲夫故四人の御子達は當院の末寺くへ

旅館を構へ今日揃ふて御廟參と存せし所へ鎌倉より上使ときて内縁ある富樫の左衛門下向
 あつて御兄弟衆へ對面とは疑ひもなき義經公を隠し置との詮議あらん去り乍ら義經公今に
 奥州へれ越しなきのらは申詳も手間隙入らず追付舟揃ふて廟參せられんニ惣衆家來を走
 らせ惣門迄見届させてよからう 端「畏まり升た 茲小笹一人は尼公の御用あらんも知れず
 是に残りや 端皆畏り升た「ト女形四人近習は橋掛りへ這入る 端「成程一大事と計り難
 い愚僧は篋の品と取出さん此際に繪像へ御回向あれノウ静殿イヤサ心静かに必ず心置る、
 茲先清徳院殿秀衡大居士佛果菩提南無阿彌陀佛く「ト同宿をつれ上手へ這入る尼公跡を
 伏拜み居る萩の前あたりを詠め小笹と入替つて 茲「館にては人目繁く世を忍ぶ静御前尼
 公の召使ひと致し置くも秀衡公の申付 尼「今住僧の物語繪像の開眼とある詞は示合せ一
 大秘密 茲「必らず恟りさまやんすかへ「ト正面の襖を開く底に又佛檀の鍔り付扉を開くと内
 より義經すつと出て 端「秀衡の衡公佐藤後室心勞添うらるや 端「ヤアあかたは義經
 様れあつるまうムリ升たわいかア 茲「何と有難い畫像能う拜み付ておかまやんせ今日迄お
 前にも知らさぬと四人の御子の心も知れずと瑞元和尙とは是る尼公が心を籠め此佛殿に忍
 び參らせ兄弟の子供衆の器量を見立味方に付參らせんと底の底迄思案して寺より館へ忍び
 穴人に悟らま玉ふなよ 茲「我頼朝に憎まき身のたすまひなき身をば故人秀衡殿の情に預

次山伏と姿次戀へ此陸奥へ参りしより尼公を始め佐藤の後室萩の前の厚い世話過分なるや、
 慈是はく有難い其お詞我子次信忠信も此世に長らへあるならば共に御力とからん者
 とく討死せし本意か御推量下さり升せう。無日外住吉浦にてお別れ申てより鎌倉へ奪取
 れての愛難義此陸奥へ流罪と成り今日やお出る翌や御顔然見る事かと待甲斐も無く秀衛様
 ははお隠れ遊ばし斯迄御連も尽るものかと泣ぬ日とてあかりしが今といふ今お顔を見てあ
 んまり嬉し悲えうてお禮を申詞もない御院主様尼公機軸の前様エ、お嬉しう存じ升わいお
 ナ慈是心弱う持玉ふお大勢乃御家人も身を忍びて姿を變へ折し寺への御見舞。無「躬が心
 首届くる迄。慈矢張必の小笹我君様にも嘸つれくお連申て積る咄を。」「そんなら参つ
 こもよふらり升るかへ。無「早うく。」「ト兩人を佛間へ入て扉を鎖し襖をいめる。向ふと御
 廟参。」「觸れ込む。無「四人の子供か廟参とあ。慈何れも御出迎ひ。」「近寄六人「ハア、ト
 橋掛りとも先の人敷出て出迎ふ淨るまに成る。」「程をあらせず打通る秀衛の惣領錦戸太
 郎國衛今年卅七歳年より猛き四方髪一理届ある其骨柄ト向ふより錦戸太郎半上下の拵ら
 へ。」「次男伊達次郎泰衡卅一歳父が譲りのいか物造苦味の走り鎌鼬はすなをに見へ
 れ面拵へ。」「伊達次郎薄肉好の拵ツカく」と出て錦戸の次に立。」「三男和泉の三郎忠衛
 廿五歳母方の血筋の實体育ち末子元吉四郎高衛十八歳父と母との振分髪上下小袖大小も筋

目正し其出立。」「和泉三郎次に本吉角前髪にて出て並ぶ。」「伊「弓矢打物軍衛迄古今獨歩
 の若武者共兄弟打連れ居並びは頼母しうこそ見へにけれ。」「母尼公を始め佐藤の後室ね
 出迎ひ御苦勞千萬。」「伊「今日父秀衛が小祥忌の法會に参籠せん爲。」「聖當院の未寺くへ旅
 館を構へる折も折鎌倉殿より俄の御上使。」「本「則對面の歸るさ直に御廟へ参詣の我く。」「四人
 「打連を立てり升る。」「慈「イサ先是へ。」「秘言々「御通あられ升う。」「然らば三人。」「三「先く
 「ト四人本舞臺へ通り宜く居並び。」「慈「御兄弟共にお早ひ佛参シテ鎌倉殿より上使の子細
 尼公にはお待兼お聞せ被成て下さり升う。」「無「さん候父秀衛日外鎌倉の御前に於て義經奥州
 へ下り玉はば我一生は守り奉らん又躬四人の中一人は鎌倉へ遣はさんと廣言放つて歸宅の
 後逝去ある事頼朝逐一に聞及び父相果し上からの兄弟残らず頼朝公に従ひ奉るか但し義經
 をかくまふ所存や申上げよ上使の趣。」「無「シテ御返答は。」「伊「此次郎の父相果られま上からは
 兄弟残らず鎌倉殿お従がふ了簡。」「無「アイヤ次郎殿父の詞の須彌山とり重し此上は母上の了
 簡次第誰にもせよ一人の鎌倉方残る三人の義經公に従ふが第一の孝行本吉も其了簡で有う
 がや。」「本「若輩の某兎角兄の仰せの如き夫ども我心に合ぬ了簡ならば其時と名くの胸にある
 事。」「伊「ヤア兄が了簡を聞届んさんとは心底を捉け較べる不所存者今一言ぬかして見よ舌
 の根切て切下げくれん。」「ト刀に手を掛る。」「無「是は扱日頃に似合はぬ泰衡殿四郎は兎もあ

ねたなだの了備此三郎が氣に喰はし母の身が玉簡が氣に喰はぬか何れ親の母の
 親子兄弟引別るより可矢の習ひの和討て見せよ兩人何ぞ小娘な一人兩人戦成る具無
 尾籠なり先づ解き出さし母の身が玉簡が氣に喰はぬか何れ親の母の
 一少の了備捕へて返して鎌倉殿の裏を食まひ者でも無し父和泉三郎の申條父の心は吐ひ
 ながら行方知る義経に忠義立は聞に鐵砲ハ……斯る時にとそ父が篋の遺言狀母尼公には
 御披見有て然る存ト升る上尾サ、子を見る事父に「かトと書のことされし遺言の狀をハッ
 藤の前へ送ハッ御院主様には遺書の箱を「奥より」只今夫へ持參致さう「正面の
 襖を開かせ瑞元先に同宿二人四ツの箱を持出て四人の前へ置く」瑞始終おれにて承はる
 義経下向無き内は大事にて大事に非ず遺書の箱は母尼公へ手渡さ参らす篋の箱は急ぎ開い
 て拜見おれハト別に遺書の箱を款の前へ披す款の前取て納める」瑞本「スリヤ此品」が
 「和泉無き父の篋とな」兄弟四人が押戴き名當の箱の封印を疾く開く鏡戸が武士も似
 合の鎧掛樋或は鎧掛坪手奔胸り呆れる赤面に次郎泰衡手早くも蓋取りのくれば是も又鏑と
 鏑との百性道具心せつれと三郎があたふた開けば「如何に胸の算盤ぐわらつとははと
 秤おちがはに喰ひ違ふたる商人道具四郎が篋は如何ぞと疑ふ間も無くト明れば父が譲り
 の太刀丹書書ハ一通付置たり四人一度に顔と顔名當の札が換りかせぬか物も得云はず

がかりと箱より先へ明た口蓋を兼て見へにける瑞元和尚横手を打ち「瑞元小娘將か
 心深き悟りの賜物此士農工商の四ツの教を悟り遺言に隨ふが孝行の第一此心を悟り玉
 をば明り走る父の遺言南無阿彌陀佛ハ……念珠爪操り入り玉ハ……兄弟四人を替てい
 出は墨筆紙硯是を四友と名づけ一所に無ければ申はねど心と心が一致せねば今並交たる士
 農工商世渡り事の二筋乍ら其様業の又別々先其如く君臣兄弟四友の如く助合ひ藤原の家を
 全するか何れ錦の我意に募りは事を謀るかハ……再議の程聞きたいハ……四人の子供
 共い何れも等々に共即は鏑かつとりハ……百姓は國の寶天の慈みは生育り五穀を國に取り
 得心爲め天に薦せし國守の身共今日の只今より采配を捨て鏑を取つて國を育つる此泰衡
 共い心安かれ世人と云ふ間お和泉の算盤取上げ、此此忠衡は此算盤三三天作の魂堅め敵の
 得意を捕手の算元緒中緒の秤の責め口三厘一毛必跡へは引かぬ懸直なし是を忠衡がハ
 出商ハ……必ずお負は仕らぬと云ふは太郎は打點頭大工道具を手に取上げ、身が了備は
 職人堅氣もちらも外は送し思案敵聞近き赤赤ると見は打て掛つて手兼の手兼追立採立三
 父自鎌退くと見は城門堅くは水を落して締固まは工手間も入らず先祖の武名も荒籠に削ら
 御手際の墨がねと些とも頼みの柱立ハ……實にも國家の棟梁と云はねど知き其勿藤尼公は老
 を忘る、悦びハ……源平藤橘の四姓も元は其如くハ……本吉殿には雷書の一通旗館へ歸と披見

の上鎌倉殿へ従ふ事今にも義経が下向あらは親子兄弟敵味方と引別る事止むらは長居の無益早のんれ。昔差圖は四郎大小をつとまり。本ハッ界り奉る何にもせし密書の通りを守るが孝子母上た去らば。箱引が、へ立歸る實に武士の骨柄なり。ト箱股立を取り大小は箱持ち向ふへ走り進入る。箱に残り十三人は黙然と去て居たりしが腰刀一度に尻落りと投出し銘く道具をかいてめば。馬待て三人篋の箱を受取からの父御の遺言守る心か。但しは引別る御所存か。無何ヤん其咎は尤乍ら父の篋の一品にて父の心慮能く知たか去り乍ら氣に喰ぬ奴原に聞かして益なき事されば此儘にて旅館へ歸りをのれ。が委にかはらん。此大郎は本坊に腰をも、篋の此鋤鋤にて堀出す出世の分別あれども云ふて聞かせて益なき者共。熱心の合ぬ兄弟の因をさつぱり立切た孟母が絹が市商人未寺へ歸つて姿を更たれ後程れ目に掛り升う。者共。農工商の用意せよ。中にとハア、山次郎の真中に錦戸和泉立上り。錦戸矢に替る鋤の引は返さぬ木工が手並み。伊篋が家名を堀出す鋤先。行を外さぬ高名帳。追附けお目に。三人掛け升う。尾。夫でこそ妾が悴。華百姓職人商人と分るば手業も別く。別れく。に成る時は。兄弟は元。他人の始まぬ。無俄か百姓の次郎泰衡持付ぬ鋤鋤で必ず家に傷つくる。へ。さういふ兄貴が墨かね違ひ下手大工の名を取られぬ。左云ふ和主が。其元が。何を小難な。雨

人ぎせい。其扱ひは則商人無益の争ひ無用に召され。互に白眼面魂中に別入る三郎の兄と兄とが心を謀る秤目も本緒中緒締の括り士農工商と引別れ睨んでこそはト。般度見得三重にてサヨン。返し。造物高二重向ふ金襖竹に雀の摸様上手折廻り塗骨障子家体下手奥深に細代癖此前植込み牡丹舞臺前上手にも牡丹の花小さき銀張りの鳴子を張り下手に打盤横植菓を四五把置き爰に春平夏平秋平冬平玉七縹子奴にて切手桶にて牡丹の元へ水掛けの体琴歌にて道具納る。何と春平おらが殿様伊達の二郎泰衡様に飛んだれ好み。秋平御兄弟が別れ。に御旅館の處。冬。最前茶番の團引にお當り被成た。俄かに百姓の手業。王。大名と云ふ者の飛んだ思ひ付致する者だ。三人。とんと乃公の解せないわい。春。乃公も篤りと聞はせねど秀衡様のお篋とやらの箱を開いた所が士農工商の四人の殿様に手道具が下りた。このことだ。夏。ハ、ア夫で本吉様は大小をお持被成れて吉祥院へお歸り被成れたか。秋。又三郎様には商人の番に御當り故清淨院へ御引取り。冬。錦戸様にハ大工道具持て閑靜院へ御歸りあつたと噂さとり。春。サ、そこで乃公の旦那二郎様には農具が當つた故此御本坊を宿を定めて牡丹畑を俄かの耕作。王。成程さうした時にはこちとらは毎日。何をすのトや。百姓の下働をせにやならぬ。秋。奴も百姓を變めた事は無けれど。冬。夫々仕付ぬ仕事の恐れ

るわい 春「イヤ、是でもまじか師匠かあくてはならないと百姓の太治兵衛とやらを四季
 平と折平が迎いにいたが 皆々「夫には及ばぬになア 内々「殿の御歸り 四人」そりや殿様の
 お成りだど」ト扣へると奥より秘信夫婦を持出て真中へ敷き宮城高つきに豆あられを載せ
 持かるも銀の茶瓶を持松ヶ枝時繪付引柄に煙草盆を持各腰元の形りの上へ置手拭前垂にて
 出る跡より伊達の次郎淺黄頭巾百姓の形りにて出て褥の上に坐す小姓上下にて二人鋤鍬を
 次郎の前に直して扣へる 宮殿様へ申上る最早晝間の刻限 信「御上意の御菓子も下賤の
 たべる豆あられ 松石とさきとやら號志盆受茶の用意も仕り 女四人「持參仕てムリ升る 次
 平、皆の者ではあいな所のと、か、百姓共此次郎が親への孝行を見たか百姓はいやと云ふ
 とて死人に文言おれどそこを云ぬが孝行何とさうは思はぬか 春「イヤモウ殿様の御孝行は
 改めて申上るにも及ばぬ事 夏「其御孝行にあやかる為り下郎等逆刺の水掛 松「是から夜あ
 べは此わらを沓草鞋の作方 冬「朝はどうから野へ出て鋤鍬の使ひ方 皆々「精出す所存でム
 リ升 次「チ、其答へ廿四孝の唐人共から十膳でも持て禮に來う歎さへあれば雪の夜に竹
 の子咽がかわけば勿ち黄金の茶釜イヤ其茶釜で思ひ出した晝時分で腹もがつくりッ茶持
 て 女皆々「畏り升た」ト女形次郎に茶を出す」 向ふ「御師範のお入り 立女皆々「何御師範の
 お入りとは 次「チ、此本坊の門前の百姓大治兵衛は農業に委まいと聞く先刻迎ひお遣きた

夫れお出迎ひの用意致せ 立女皆々「畏り升てムリ升る」ト皆出迎ふ向ふより太治兵衛木綿簀
 じ中親仁の百姓にて鋤鍬を腰にさし横鉢巻にて出て来る跡より折平四季平糴子奴にて付出
 て 女二人「上りませい」 太治「ハアヤカヤまい行うと思やこそ歩いて居るトやないか
 タガ是迄こんち御殿へ來ると下りませい」ト云ふが定まり所をひつ返して上り升せし
 くはこりやまの規「トやわりの」トいへながら本無喜へ來る」 折平「こらは何をぬ
 かつ 四季平「よく御殿へ上り居らぬか上れ」 松「是く」四季平「そりや何事 かる」我
 りの殿様兼衛様の傍邊 皆々「お師範様のお入り聞 皆々「お出迎ひイヤ先是へ 四人「お通りあ
 られ升う 太治「是はしたるも前方は山の薯蕷て居やんすかと思ふた何の御地頭じや無
 其様に辭儀の入りぬチ、次郎作殿黙つて居さすから見をれうと一たえらい牛盗人ではあ
 るわいの 春「ヤイ、我君を牛盗人とは存外千万 四「今一應云つて見よ 太治「コリヤ、
 兩人扣へておらふ 春「殿様の御意 立三人「扣をて居らう 折四季「チエイ「ト扣へる」 次「何に
 治兵衛彼等が無禮は赦して下され」 太治「ハア扱無禮も絲瓜もゆらぬわいの 女四人「お腰掛
 られ升う」ト舞を上り口へ敷く」 太治「如來様の打敷見たやうな蒲團の上へどう尻が坐る
 者でマア更らにへたかつて草鞋くら谷の打やうやつて見る心かの 皆々「師を迎へまも傳授が
 受けたさッ用意の横柄打盤を持て 立皆々「チエイ「ト打盤横柄を持行次郎打盤を扣へ

横槌を構へる」大次「ア、是くさう持て藁が打てる物かいのハア此槌を右の手にから持て左で藁を廻し打にとんくく」小藁を打て見せて」大造「とまん遍に打ねば藁にむらが出来るわいの」大「成程左右の働さが餘程六かいわへ」大造「サアそるく」打たりく」大次「打ね槌を渡す」大「ヨラ藁は弓手槌は馬手に斯う構へて」ト不器用に藁を打つ」大造「そんな事をは錢やーにもありやせまい」エ、不器容か代呂物トや是能う見やんせ」ト槌を取り柏子能く藁打つて」大造「サアやつたろく」大「是でよいいな」大次「マア」大槌を物トやそこできぐつて又打のしや」大「よ、そぐると云ふはな」大次「ハア藁を取事」大「其槌とは此藁にも」大次「是又情ない柿や栗は藁じやない此藁をカウくするをそぐると云ひ此出た屑は則藁ツレツシ」ト手早く藁をそぐる事あつて」大造「マアわら乃打様は大方にやうかされる是からは鋤鎌の使ひ方マア一服やらかさう」女皆々「殿様にもちとれ休み被成升う」大「如何様暫時休息せうわへ」ト女形皆く次郎を煽ぐ」向ふと「錦戸乃太郎様ね入」皆々「何太郎様のお入とあ」大「エ、面倒な奴共は太治兵衛殿を次へ伴ひ同朋格に致させてよかろう」大造「何トや此太治兵衛を同朋格立六人」イヤ御越被成れい」大造「お辭儀まに行升うかい」ト太治兵衛奴六人付添ひ下座へ這入る向より太郎淺黄頭巾大工の形り道具箱をかたげ出る金紋の狹箱竹に雀の紋所臺傘立傘大鳥毛持弓持筒行列にて徒士若黨大勢出て行列戸家の内に數多あ

る体ぢや」大「アア」大「家來其門前お招へて居よ」行列「ハア」ト戸屋の内にで響の音あて皆く花道へ這入る此内奥より尾公秋の前付添出て其中に坐前太郎は二重の上手へ通る」居テ、錦戸にと早い出仕」大「御二人がお姿テモ能うお似合ひ被成升た」大「母人某令日より太郎作と改め家の破損のついでに普請御相談に參でゐる」大「成程兄貴が渡世は大工ハテ馬鹿く」大「」大「泰衡殿にと最前より田畑の働さ彌々父御も仰を背かぬ誠の孝行頼母トウ存ト升る」大「」大「姿形ちは大工なれ共魂變らぬ錦戸國衛此本坊の花檀の庭は則父が僅ならすや土を發く大たわけ夫は何やや孝行とはちとれ鹿相のと存るて」大「ウ、ハア、ハア、花檀にもあれ屋敷にもせよ打崩して田地にするは是を天の道居坐はり仕事の腰抜大王が知らぬ事サ」大「其腐りか」つた家の普請の手際見よ」大「下手普請は望みにあひ」大「イ、ヤ鎌をかたげて手を放す無分別をため直すは棟梁が詞の黒打」大「此太郎作が帶銀替り鎌のひね打見せてくさう」ト岐度成つて立上る」大「夫人」其言ひ争が不孝の第一」大「其心では遺書乃一通の見せられぬ三郎殿見へる迄座敷をへて」大「然らば暫く休息致さう」大「そんならちといび」大次「とは云へ」ト立ち掛るを」大「先づお入小被成升う」ト皆々奥へ這入る跡合方に成り奥より太治兵衛裾々皮の殿中羽織を着てうそく出て」大「」大「農業の師範をした藁美さあつて同朋格とやらは取立いと着付もせぬ程々皮の殿中羽織を」トつちもあひ」ト見

建合圖の笛を吹く下手より折平四季平出也。二人「梶原様の御家來忠大殿。本道シイ、ト
 押へる兩人も見廻す。太治兵衛下へ下りて。」太道「兼て主人の仰を受け百姓と成りて入込み
 しも隠密の役目。」ト玉七下手より出て此様子を見て小蔭へ這入る。四三「秀衛が遺言を
 おつて四人の悴が士農工商。折四人の内いすれを義經に心を寄するに相違ない。太道サア
 心惜いは鎌戸和泉同朋に取り立しこと幸ひ義經と見たならば毒茶を吞せて即座にびりく。
 四三「通れ妙計。太次「若老其時は。」ト叫く。向ふと「和泉三郎様御入り。兩人「ありや次郎か
 太道「コレ。」ト押へ兩人は下坐へ太治兵衛は奥へ這入る向より和泉三郎袴羽織短刀一本さ
 一袋入る二尺さしを大小の襟はしてさし出づる跡より近習二人呉服荷を肩げ小姓一人帛紗
 に大一腰を持出る奥より信夫松ヶ枝かるも宮城出迎ひ。かゝる三郎様にこれ早やい御出仕
 信夫「尼公様の仰せを受。四人「お出迎ひ申上する。三郎「何母人よりのお出迎ひとさ。○さらば
 夫へ参り升うか。」ト本舞臺へ來る近習小姓は下座へ扣へる女形四人三郎を取り巻く。かゝるも
 何と皆様太郎様次郎様も替る姿のお身かれと。室「それく、常々からサア、た意地のよさ
 そふな、お産れ故いつそア、形りもよい事。信「あかた様計りの皆が心残り然し何にもようお
 似合なさるわいの。松「夫いの立派でしやんと否味あうさうして商ひも御繁昌で。四人「ムリ
 升ふぞ。三郎「如何にもお腰元中新店を見物にちとお出とこるは無量院の御堂のついで角家

名も直に泉屋三郎兵衛直段も服の店より随分と下直にして是安兵衛長吉其風呂敷包荷箱も
 置で先へぬにや。近「通れハッ畏てム升る。」ト下坐へ這入る。かゝる三本に呉服所が來たら一葉
 葵は中形が欲かつたマアお烟草なりと。昔々「召上り升いおア。」ト烟草盆を持行取巻。三郎「
 是のくた搦ひ御無用マア何より母尼公佐藤の後室にも店開きの祝ひに御用を願ひ升と
 取次で下さり升せ。女音々「ドレ御取次ぎ致し升ふ。」ト奥へ這入る引違ふて奥より太治兵衛
 帛紗に茶碗を載せ持出て。太道「呉服所和泉屋三郎兵衛殿へ煎茶一服差上する。」ト差出す
 三郎「おろりと見て。三郎「其方が手前か。太道「服加減如何でムリ升う。三郎「ドレ。」ト茶碗を取
 見てこそし有て。三郎「兄次郎殿の同朋には見馴ぬ其方名の何と申す。」ト云乍ら茶碗を下に
 置き。太道「我等此本坊の門前にて唯の百姓何が二郎様父御の御遺言とて俄百姓農業は師範
 せよと御傳授申た御褒美とあつて殿中羽織を拜領した御同朋格天窓は百姓骸は茶坊主願の
 太治兵衛と申すの拙者がことでムリ升る。泉「成程泰衡殿には能ひ家來を持つてやれたおア
 太道「先づお茶召召上られ升ぬか。泉「サ、吞うく。」ト茶碗を取こなし有めて又下に置て
 和泉「内に茶がさめたと見ゆる此茶は鶴氏其方に譲らうサ、吞やれく。」太道「エ、泉「ハテ
 改めて譲るのさ。太道「滅相お此れ茶哉。泉「さめ茶毒に成るか。太道「エ、泉「陪臣の其方づ
 れ和泉乃三郎忠衛が手づから譲つた茶をさせたぬ。太道「サア夫れいお。泉「早く吞ぬか。太

湯サアト太次兵衛狼狽茶碗を取を落トト大造南無三蔵相を執トた立替て参り升ト大
 茶碗を取て逃ばて這入る泉の三郎こなま有て手を拍くと奴花平花平御用でふり升るか
 泉近ト花ハツト傍へ寄る泉次郎殿のお抱へあつた鱈の本治兵衛とやら此本坊の門
 前の百姓と申事じやが頼ト左様か花成程門前の百姓とやら申事農業の手業御稽古乃爲
 召寄せられ升たる者でふり升る泉ハハア花其義に付き升てはト邊りを見花茶御
 免ト傍へ行く叫く「さう有うと存じた夫あればコソ」ト花平に叫く「花」心得升た直
 様是より泉早くト花ハツト向ぬへ走り這入る泉年に似合ぬ小さかまき奴での
 有るわへト泉よと秘小笹備にて菓子盆を掬能所へ直し小笹鹿相なる菓子召上られ升
花泉底意知れぬ馳走ふりより店開きの呉服所此荷の内の呉服物御用の程を願ひ升るト
 荷の包みを引寄せ無器用に帶地反物を前へ並せれ小笹サア呉服所の買物を尼公様に成
 代り秘に見届け参れよと萩の前様の云付泉夫の有難いサアト御らうじやつて下さり升
せト小笹反物帶地取取て見る三郎段々ト代呂物を拾毒詞にて差出す小笹本にとれが
 帶地にさからうないさア泉左ねばなア其錦一寸目には高でととやらが派手お物お前に下
 度似合升う小ア泉是が秘まにぬへ泉マイ殊に錦又目出度物綿木と申て嫁入の先走り
小ア泉人の心も知すにわトや嫁入りいや泉ホトイトまいく小逆も男を持から侍

も嫌ひ百姓や賊人は猶嫌ひはんにト商人の御内義様おから成りたいわいさア泉へエ夫
 の耳よりお事トやなア小笹アイ町人の女房に成る心さう乍ら町風の帶に錦戸はいや泉エ
小笹イ、エイおア錦の帶にトもツイしやらほどけがして力に成まいわいさア泉へ
エ、夫故錦は小笹アイいや又伊達もイヤエたしが力に思ふて居る思案の壺は泉誰であ
 らうな小お前泉エ、小サア其れ前の心は泉思ふて居るともア小笹は名から
 て可愛らしいと思ふて居れとト獨吟の内小笹引留る三郎をふりさト反物を持つて行ふて
 する端を引ばりたぐり寄る小和泉さん打明けて下さんせ泉打明けひとこそりや何を
小れ前の心を泉此三郎が心底の母人に直トに云ふて聞かさうト立上る小いや
トト泉奥へはやらぬ此場で聞たい心中見たい泉ハテ扱トとい白化の白拍子靜御前爰放
 した小ふ、我名を靜と知られし上は猶やらぬト支へる故反物を打付る反物はどけて幡
 さらトと解て出る小ヤア此幡に俗名泉の三郎忠衛と御記トあるは泉姿の商人町人に
 もせよ義經公に兼てより命を捧げト心の潔白小スリヤ疾くより我君にチエ、有難い泉
 未だ拜顔は得ねども義經公此本坊におわとよト鎌倉に聞へ富樫の左衛門梶原平治近ト
 に押寄る嵐聞一大事の此時節に兄の心底心元さト小トイエ錦戸伊達れ心底も問落きて見
 せ升う泉然らば直に義經公へお目見へなさんト兩人立上る折平四季平双方より伺ひ居

てツカ〜と出て」 兩人「忠衡覺悟」ト切て掛る小笹刀次取て渡す三郎抜いて切捨て」 泉サ
 案内まやれ 淨「連れて一間へ入相の」ト送りにて兩人奥へ行掛るチョン〜にて返一
 造物通りの網代屏上手家体此内燭臺灯一有り下手竹藪 淨「鐘を響きて暮過る坐敷〜も
 奥深き灯しの影と諸共に輝く源氏の御大將酒宴半ばも満る頃時躁々群雀坐敷へばつと飛込
 て爰の小庭か〜この小坐敷障子に當つて飛去りける」ト此内雀笛にて差金の雀數多群て上
 手正面の坐敷へ飛込む燈火消る 淨「何事やらんと錦戸が障子細目に見廻せば人影ちらつく
 星明りシヤア時群鳥騒ぎい忍びの者ぞざんかきと瞬をせぬこた是も伺ふ心は一つ姿別
 れて坐敷と庭園に眞黒くろ裝束兜頭巾に面隠し奥を目掛て差足拔足つ〜と通るを太郎國衡
 首筋掴んで引戻せばかの忍び顔見知つたか恠り〜互に點頭呷合ひ一間へこそは忍び入る
 「ト此内上手の屋体より太郎伺ふ橋掛りより元吉四郎忍びの形りにて出て邊りを伺ひ上手
 へ行うとする太郎突戻し双方顔見合せ恠り太郎シイと押へて呷き連立て上手の家体へ這入
 る淨るりの間は床と帷の打合せの相方此道具引割る

造物一面の牡丹山の遠見上手に一間程の竹藪舞臺前牡丹をせり上る花道所〜に牡丹の畝に
 て留る 淨「更け渡る長谷に名高き無量光院見渡す山も奥深く今を盛りの牡丹花見事にも亦
 物凄一」ト能時分に次郎好みの形り鍬を持ち眞中へせり上る」 淨「時分もよしと次郎泰衡

邊りみ心鍬取延べて堀りうがつ」ト次郎あちこち堀返す 淨「何國ともなく飛び來る番ひの
 蝶鍬を離れず群がるの扱こそふまぎと心付猶も鍬にて堀り返一堀返せば親へ不孝か孝行か
 郭巨にあらぬ鍬先へ堀當つたる件の箱」ト此内三郎竹藪突押わけ急度伺ふト、次郎箱を堀
 出」 次「扱こそな 淨「埋みし箱を取り出し打碎き〜件の鍬ぎ手に収上げ押戴き〜腰
 にぼつみみ笑つばの次郎 次「物のため一 淨」と拔放せば忽ち寄來る夥たの小蝶番ひはあれ
 ず餘念なく花に小蝶の飛こふ有様次郎泰衡急度目を付け 次「ハテ怪一や今堀り出せま此鍬
 抜けば忽ちアレ〜」 三郎「數多小蝶の群り遊ぶアノ有様 次「殊に夜陰のまつ只中 三郎
 「黑白わからぬ乗る小蝶 次「善か 三「悪う 兩人「ハテ訝か一やあア」ト」 次「よ、扱は父が
 筐の劔チエ、忝さい 淨「忝やと次郎泰衡小蝶と共に小踊りなま劔を鞘に納むれば群がる
 小蝶は何國やもなく飛去たり 次「此上いよ、 淨「行をやらトと向ふにすつくと和泉三郎立
 塞がり」ト次郎は舞臺のうねを堀て大小を出し腰にさみめて行うととる三郎前に立て急度留
 め」 三郎「伊達の次郎泰衡殿百姓止めて腰刀奥を目掛て何の用 次「ヤ黙れ三郎九腰の素町
 人似合ふた様に秤り目覺へて商ひ精出せ百姓に成つたは表向の孝行二腰さす此身の爲奥
 へ踏込み實正を見届くれん 淨「引のけて駈出す身をかわりて確と引留め」 三「遣ぬ〜尺の
 堅ひ商賣柄舌三寸で顯はれたあなたのお事扱は鎌倉方へ注進せん爲めな 次「マアそんな物

で有りかへ三親の遺言根性此二尺の竹尺で觸直さん 淨「どうと打てばひらりとくくり
 刀は鏝にては又まを打 太「よ、ハ、ハ、ハ、義經が首取て鎌倉へ隨ふ所存 淨「邪广ひろく
 と援打をさしたるなりと尺にて受取 三「どのこいむだめは仕らん 太「何を面倒を 淨「さらへ
 落してくれんすと打て掛ければかいくくり又つゝかける次郎がたんびら抜けは寄り来る蝶
 々々蝶の羽返し兄弟が互の手練かゆいゝと吹來る夜嵐の飯を鞘に納ればひらゝは
 つと飛去る小蝶「ト此淨るり通りあつてと、兩人花道へ追ふて行き立廻り飯をかせに舞臺
 へ戻る此内上手より二間の高二重の本榎付前側障子本屋根此上の丸窓見事なる道具引出し
 淨「手早の三郎疊かけたトくともためらう後ろの障子越次郎がたぶさ引摺みくつと貫ぬく
 切先にうんと計りに七頼八倒障子の血煙り錦戸がすつくと立たる其顔色尼公を伴ひ萩の前
 驚き一間を立出れば二度拘りに三郎是のと呆る、計りあり次郎は苦き聲を上げ次郎待た
 と押しめ 太「ア、暫く々たつた一言 太「ヤアうぬが悪言聞事ない 太「チ、此次郎が悪言雜
 言申たればこそ太郎殿今突込れたる刀にて義經公へ忠義の心底見へて満足く今日富樫の
 左衛門上使の時真先立て和殿一人參られ密々の物語其跡へ追つゝいて兄弟三人表向なる上
 使の口上「ヤ心得ず富樫が妹と縁有る貴殿扱の鎌倉方に隨がふ所存と白眼だ故 太「扱
 は此錦戸を疑ふては仕業に相違ないかッレ三郎疾く助けよ 三「心得升た心を儲にもたつま

やれ 淨「心得以前の幡取出し刀拔取しゆかど巻ば 太「モウよゆ、今は儲かよつと聞母城
 程富樫左衛門某を密に招き安宅の關にて判官殿を見知らぬ顔にて通し奉れば此奥州に御忍
 びある事治定せり何卒うくまひ奉れどある富樫が情兄弟へ知らさぬも世を憚る此時節ニリ
 ヤ次郎赦してくれ忍びの疑ひ晴させん是へ參れ 四「ハ、ハ、ハ、淨「黒髪束の忍びの者頭巾を取
 ちば本吉四郎人々呆れ様子いと尋にはつと畏り 四「無「さん候父の儀に付置き玉ふ密書の一
 通披見せし所某一人鎌倉へ遣しなば義經を討手の大將玉はるべし 淨「其時こそ密かに元服
 して城中は忍び入り義經公の身代を 四「耶「焼首とあし欺かば 淨「二心どの得も云の七其際
 に義經公落延び玉ふも心易いと遺言狀 四「其時定めて事急ならん御對面も叶ふまト今宵忍
 んや母を頼み御目見へのお願ひ申さん爲に參りた某 太「ヤア扱は太郎殿と一ツにてはあか
 りまか 太「何と次郎疑ひを晴しておくりやま 太「イヤ疑ふたは此次郎が 太「イヤ此太郎が
 三「イヤ此三郎も 四「四郎めも 淨「明一谷ふたる兄弟四人仁有る父に義ある母禮智も深き
 誠の子實尼公を中に取返いて五人の心一時に親の泣きと涙涙まぎれて哀れなり 三「ホ、
 ヲ揃ひも揃ひし御兄弟打とけたる嬉しさを秀衡様知せたい 尾「一人は武士残る三人を百
 姓職人町人になま玉ふは鎌倉方へよらすさわらす親の慈悲心忘るゝなア 三「イデ此上の御
 對面我君お聞あられ升たか「ト障子の内にて」 三「ホ、ウ四人の心底義經聞て祝着せり 淨

國傳子開かせ義經公辨を伴ひ立出玉へは傍に守護する四人の勇士津の戸片岡伊勢駿河以前
 だ替る立派の出立皆々、度は、ハ、ハ、ハ、ト頭を下げて禮をさす義經莞爾と打笑玉ひ、一齊に
 頼もじ、ハ、ハ、ハ、先刻庭より數多の雀飛入て我手の内に羽を休め、故今宵の事共覺を、ハ、ハ、ハ、
 兄弟が直なる心は則竹竹は雀の秀衡が家の紋家の印を我手の内に握り、ハ、ハ、ハ、疑はなく兄弟が
 我を憫む徵や、ハ、ハ、ハ、亦我君未だ御曹子の折から此陸奥に御下り有て様々、ハ、ハ、ハ、介抱うけ、ハ、ハ、ハ、
 終は源氏再興の旗上げなま、ハ、ハ、ハ、勢平家追討乃御大將とは成り玉ふ、ハ、ハ、ハ、識者の爲に御兄
 弟中不和と成り、ハ、ハ、ハ、詐り山伏と成て此地に下り姿を變て、ハ、ハ、ハ、君の御守護、ハ、ハ、ハ、頼み少し義
 經が遺言と云ひ乍ら尼公の情方の志、ハ、ハ、ハ、の世にはおぼろる、ハ、ハ、ハ、去り乍ら次郎は忠義に
 命を捨てまは不便は有様、ハ、ハ、ハ、さまも功ある大將軍悲歎の涙、ハ、ハ、ハ、基玉へは、ハ、ハ、ハ、勿体なき御詫や
 と共に袖を絞りける深手に屈せぬ次郎、ハ、ハ、ハ、奉衛、ハ、ハ、ハ、兄弟心の合上は鎌倉勢何程の事有らん
 此上は父の篋のまわりの劔今改めて三郎汝に譲る、ハ、ハ、ハ、右の劔を三郎が前は押原と、ハ、ハ、ハ、幸
 ひく、遺書の箱義經公の御前にて開くべし、ハ、ハ、ハ、御披見有ぬと大將の前にとこゝろは押開く太
 郎國衛暫し思索し、ハ、ハ、ハ、遺書の文言津の戸片岡伊勢駿河兄弟四人が憑接廻らば、ハ、ハ、ハ、申上ん其詞
 に批判あらば、ハ、ハ、ハ、つとを打て咎め玉へ、ハ、ハ、ハ、立四人「心得申明てれ見やれ、ハ、ハ、ハ、遺書を明けは、ハ、ハ、ハ、おな
 まら所隔て、ハ、ハ、ハ、錦戸太郎、ハ、ハ、ハ、先士農工商の篋を送り玉わりまは、ハ、ハ、ハ、云ふに及ばず武士であけね

ば鎌倉より咎めぬ、ハ、ハ、ハ、又義經公を隠く、ハ、ハ、ハ、置く共得も言はず、ハ、ハ、ハ、四郎「元ま武世、ハ、ハ、ハ、此四郎鎌倉
 方に、ハ、ハ、ハ、子細もあるま、ハ、ハ、ハ、太郎「次郎が百姓我職人、ハ、ハ、ハ、三郎が秤目、ハ、ハ、ハ、謀り事を廻ら、ハ、ハ、ハ、諸軍の欠引果
 服の則旗指物、ハ、ハ、ハ、ハ、負軍と見るならば、ハ、ハ、ハ、津島々を打渡り、ハ、ハ、ハ、多きが鳥迄心を通、ハ、ハ、ハ、命全守り奉
 れとの事あらん、ハ、ハ、ハ、次「此大郎か農作は兵糧第一五拾四郡の田畠の用意柴田白川十五郡岩城岩
 手柴田菊田雲井厚岸の軍勢は伊達の次郎が下知たるべし、ハ、ハ、ハ、三「松嶋七郡鹽釜六郡の旗頭ハ此
 三郎出羽乃國は十二郡君ハお馬の秣苜場に残去、ハ、ハ、ハ、伊達の太木戸切ふ、ハ、ハ、ハ、さ龜割飯に逆茂木引
 三人心を一致した敵を峻岨におびき入れ、ハ、ハ、ハ、三郎「袋の中の風よりいと安し深入して裏切せら
 び、ハ、ハ、ハ、次「二度の負に氣を落すな三度負に腹切る、ハ、ハ、ハ、太「我又大王は棟梁義經公は國家の柱、ハ、ハ、ハ、
 者之業にて柱をぬかば棟木梁一時にばたくと落る如し、ハ、ハ、ハ、若し鎌倉が催促せば、ハ、ハ、ハ、三郎「
 一度の使に返事す、ハ、ハ、ハ、次「二度の使を討て捨て、ハ、ハ、ハ、太「三度に及ばば切て出あらし、ハ、ハ、ハ、この籠のまくり
 切更々さつと追ちらし、ハ、ハ、ハ、主に向はす、ハ、ハ、ハ、錐り引き、ハ、ハ、ハ、津「旗上げ棟上げ餅まく如く東西へ弓を張千歳
 どう万歳とう、ハ、ハ、ハ、槌の拍子の軍法立、ハ、ハ、ハ、太「三「父の遺言うくの通りで、ハ、ハ、ハ、らうがや、ハ、ハ、ハ、津「割符を合す
 辨舌に御大將を始めとして、ハ、ハ、ハ、御前萩の前尼公も共に、ハ、ハ、ハ、はつと感じ入たる計り、ハ、ハ、ハ、折柄、ハ、ハ、ハ、
 鶴の太治兵衛物蔭より現出、ハ、ハ、ハ、太「道「委細の様子は、ハ、ハ、ハ、残らず問た、ハ、ハ、ハ、斯く有らんと姿を替へ入込んだ
 る番場の忠太梶原殿へ相圖の手立、ハ、ハ、ハ、エイ、ハ、ハ、ハ、津「磔と共に相圖の狼烟一度に起る、ハ、ハ、ハ、貝鉦太鼓、ハ、ハ、ハ、ト太

治兵衛(下手)の松の木へ磔を打と掛けゑんせうばつと立つとんちやん打込み螺貝の音 大「誰か有る忠太を逃すか 軍兵二人「ハッ」「ト下手より軍兵二人出て太治兵衛に切て掛る一寸立廻つて二人を切て捨て 中「義経始め錦戸兄弟今日目に物見せて呉れん 目「目に物見せんと言拾惚門として走り行和泉三郎聲を掛け「ト太治兵衛向ふへ走り遣入る」三郎「夫何れも跡追欠て 四人「心得升た」「ト立上る」 義「ヤレ方々騒がれを兼て龜井六郎に申付置たる事も有れば先々叩へい 四人「ハッ 淨「詞も未だ終らぬ内忠太が首を切先に突貫き龜井六郎馳來り「ト花道より龜井前髪り、しきあれの形りにて忠太が首を刃に突はま走り出て」 龜「ハッ我君へ御注進 龜「龜井六郎「ヤ々様子は何となく 龜「ハッ上使の富樫は歸りしかと跡に残りえ梶原景高 淨「兼て我君御座ある事見出さん爲に犬を入れ 龜「百姓畑の太治兵衛は彼が郎等番場忠太 淨「注進せんすと欠出せまを折とく龜井出くわい 龜「首討取て此通り軍の手始め幸先よ 淨「急き御出馬然るべまとしきつてこそは告知らす 大「ホ、ウ潔くく、梶原如きは何手間隙 三郎「只一戦に鎌倉勢追散すは最と易し 四郎「我は富樫の左衛門と共に彼乃地へ出立せん 尾「残の太郎三郎が 燕「不和ある中も本吉よま 龜「揃ひも揃ひし勇將勇者 燕「とは云へ散行く次郎泰衡 大「イヤ捨る命は君への忠義 三「心残さす 三人「成佛あれ 大「何れも去ば 皆々「去ば 淨「去ばく此世の知死期刃を援ばがけり」と伊達

大木戸錦戸が榮ゆる家こと「ト段切宜しく太鼓入各見得能く拍子幕」

...

...

明治廿七年八月三十日印刷
明治廿七年九月六日發行

定價金三錢

版及行所
權興有

發行者兼
大坂市東區備後町四丁目
四拾番屋敷
中西貞行

印刷者
大坂市北區源藏町
三拾貳番屋敷
秦 小一郎

Handwritten text in the upper right quadrant, possibly a title or a specific section header.

Vertical column of handwritten text on the left side of the page.

Multiple vertical columns of handwritten text in the lower right quadrant, appearing to be a list or a detailed record.

Vertical column of handwritten text at the bottom left of the page.

147
4.05

088647-000-4

特52-566

伊達錦五十四郡 前編

中西 貞行/著

M27

DBJ-0306

